

# 大道中学校だより 12月号

平成30年12月19日

校長 永山泰士

## 次の時代を担う若者たち

生徒指導専任 藤野 泰彦

12月も残すところ2週間、吹く風の冷たさに心が折れそうになる日も多くなりました。いよいよ今年も締めくくりの月が来たと感慨深い思いになります。ちまたでは天皇陛下の生前退位が話題になり、何かと「平成最後の～」という言葉を目にするようになりました。惜しまれながら過ぎていく平成という時代も終わりを迎つつあります。行く年を振り返りこの1年間の歩みを整理すること、そして来る年の抱負を掲げより良いスタートが切れるように準備をすること、さらに新たな元号とともに始まる新時代をいかに生きるかという視座をもつことが大切であると思います。

さて、今年のベストセラー本といえば、マガジンハウスから出版された吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』です。1937年に出版されて以来、多くの人に読み継がれてきた名著が、80年の時を経て再びブームを巻き起こしました。もちろん、漫画版が出版されたことや前書きをジャーナリストの池上彰さんが書いたことも大きな反響を呼んでいます。やはり内容面で優れた点が多くあることが時代の求めるところと呼応し、多くの読者を獲得することにつながったのではないのでしょうか。

私の手元にあるのは岩波文庫版で、かつて古本屋（最近減りましたね）をさまようように歩き回っていた学生時代（えっ、15年前！）に購入したものです。私の印象に残っているのはこんなエピソードです。中学2年生のコペル君が友人3人と遊んでいる時、ひょんなことから仲間の1人が上級生にからまれ制裁をくらうこととなります。他の友人2人は彼をかばい、助けようとしませんが、同じようにやられてしまいます。そんな状況の中、何もできずにただ立ち尽くすコペル君。無言で立ち去る3人。決定的な溝が生まれた瞬間です。最初は3人にどう言い訳をするかということばかり考えてしまいますが、涙に明け暮れ夜も眠れない日々を過ごす中で、次第に後悔と自己否定を繰り返すようになり、過ちを犯してしまった自分と向き合えるようになります。このエピソードから得られる教訓はもちろん「失敗から学ぶ」ということです。しかし、話はこれだけでは終わらず、この本のキーパーソンである親戚のおじさんはコペル君に次のような言葉を投げかけ哲学的な問いへと発展させていきます。

「僕たちは人間として生きてゆく途中で、子供は子供なりに、大人は大人なりに、いろいろと悲しいことや、つらいことや、苦しいことに会う。もちろん、それは誰にとっても、決して望ましいことではない。しかし、こうして悲しいことや、つらいことや、苦しいことに会うおかげで、僕たちは、本来人間がどういふものであるか、ということを知るんだ。」

別れが悲しいのは出会いの喜びを知っているから、外周がつかなくても走るはその先に勝利があると信じているから、勉強が苦しいと思っても続けるのは・・・から？ぜひとも自分自身で答えを導いてください。

中学校3年間の中で、実にさまざまな出来事が起こりますが、「自分がどうありたいのか」という物差しがあるかないかによって、受け止め方は大きく変わってきます。志が高ければ高いほうが、失敗したときの落胆は大きいかもしれません。しかし、そこから得られるものもまた大きいことでしょう。チャレンジをして成功することもあれば、ミスをすることもあります。しかし、チャレンジしなければ得られるものも少ないはずです。「自分はどうありたいか」すなわち「どう生きるか」ということを追究することが、より充実した学校生活を送るために必要なことではないでしょうか。

人生100年と言われるようになり、学歴や就職がゴールではない、そんな時代に突入しました。だからこそ、「自分はどうありたいか」、「どんな人生を送ろうか」という問いを自分自身に向け、生涯を通して学び続けていく姿勢が大切になってきます。学び続ける中で常に自分をアップデートし、次の時代をたくましく歩んでいってほしいと思います。そして、その歩みが、この先の人生をより豊かなものにしていくであろうと信じています。